

混成語について

伊 東 美 津

1. はじめに

威勢の良い江戸っ子の啖呵に胸がすく古典落語の名作「大工調べ」で「あたぼう」の意味を尋ねる与太郎に棟梁の政五郎が、それは、「あたりまえだ」「べらぼうめ」を詰めたものであると言うくだりがある。「あたぼう」は、棟梁の政五郎の思いつきで勝手気ままに作られたかのようなのだが、その形成過程を見ると生産性のある語形成規則で作られていることがわかる。つまり、「あたりまえだ」「べらぼうめ」から「あたぼう」が形成されるように、二つの単語の一部を取り出し、ない交ぜにして新しい形を作り出す語形成を混成と言い、そのようにして形成された語は混成語と呼ばれている。「あたぼう」のほかにも、「ゆう」と「むすぶ」の混成語「ゆすぶ」、「とらえる」と「つかまえる」の混成語「とらまえる」などがある。

混成語は、また、かばん語と呼ばれることもあるが、その命名者は、イギリスの童話作家 Lewis Carroll である。Lewis Carroll は *Through the Looking Glass* の Jabberwocky の詩の中で、chuckle と snort から形成された chortle などの混成語を作り出し、それらは、かばんの中に二つのことばを詰め込むように、二つのことばの意味が一つのことばに詰め込んでいることから「旅行かばん語のようなもの」であるとし、その結果、そのような語形成によって生み出された混成語は、かばん語とも呼ばれるようになった。Lewis Carroll が、かばん語と名づけるまで、英語に、混成による語形成がなかったわけではない。

Lewis Carroll 以前にも、flash と gush から flush、twist と whirl から twirl、dumb と confound から dumfound、flutter と hurry から flurry などの混成語が存在し、すでに英語の語彙の一部となっていた。¹このように、混成による語形成過程は、日本語特有のものではなく、英語にも広く見られる現象であり、smoke と fog からの混成語 smog、motor と hotel からの混成語 motel などは、外来語として日本語の語彙の一部にもなっている。

混成による語形成は、複合や派生による語形成と比較すると、あまり生産的ではなく、また、一時的で、その場で消えてしまう語が多いため、複合や派生による語形成のように形態論の研究において中核をなす存在として扱われることはなかった。しかしながら、一時的ではあるにせよ、メディアの新語、新製品のネーミング、ことば遊びを好む若者ことばなどでは、意識的かつ生産的に形成されている。²混成語形成の過程は、二つの語の一部を切り取って結合させるものであるが、それは恣意的なものではなく、どの部分をどのように切り取るかについて規則性が存在することが先行研究で指摘されている。そこで、本稿では、先行研究で提案された制約を検証するとともに、英語と日本語の混成過程の特徴や条件について考察したい。

2. 混成語と複合語短縮

二つの語の一部を抜き出し一語を作り出す語形成には、混成語形成のほかに、複合語の短縮形がある。複合語の中でも、特に、外来語の複合語は長くなるため「パーソナル/コンピュータ」、「リモート/コントロール」、「エア/コンディショナー」などは、それぞれ「パソコン」、「リモコン」、「エアコン」のように短縮され、複合語の短縮形と意識されることなく日常的に頻繁に使用されている。英語の場合は、日本語に比べ、複合語の短縮形は生産的ではないが、taximetercab の短縮形 taxicab や science fiction の短縮形 sci-fi などがある。日本語では、複合語の短縮形は生産性が高いため、以下に示すように豊富な例がある。

- (1) 「ポケモン (ポケット/モンスター)」「ゲーセン (ゲーム/センター)」「モーむす (モーニング/娘)」「インカレ (インター/カレッジ)」「ジャンスカ (ジャンパー/スカート)」「キムタク (木村/拓也)」「ドリカム (ドリーム/カムストroller)」「プレステ (プレイ/ステーション)」「マツキヨ (マツモト/キヨシ)」「ミスチル (ミスター/チルドレン)」「トヨエツ (豊川/悦志)」「パワハラ (パワー/ハラスメント)」「ファミレス (ファミリー/レストラン)」「プリクラ (プリント/クラブ)」

(1)のような複合語の短縮形は、二語の一部を切り取って生成されているため、しばしば、混成語と混同されやすい。³しかしながら、両者にはそれぞれの語形成過程において大きな違いがあり、それは、入力となる記号列がレキシコンに記載されているかどうかということである。複合語の短縮形形成の入力となる記号列である複合語は、文法の語形成部門において、複合語形成の過程を経てレキシコンに記載されている。一方、混成語形成の入力となる記号列としての二つの語は、それぞれ、レキシコンに記載されてはいるが、入力となる二つの語の連続はレキシコンに記載されていない。つまり、複合語の短縮形「パソコン」の入力となる「パーソナル/コンピュータ」は複合語としてレキシコンに存在するが、混成語「とらまえる」の入力となる記号列「とらえる/つかまえる」は一語として、レキシコンには存在しない。これは、日本語だけでなく、英語にも当てはまる。sci-fiの入力となる science fiction はレキシコンに存在するが、smogの入力である smoke/fog という二語の連続はレキシコンにはない。

- (2) a. AB/CD → AC b. AB/CD → AD

また、複合語の短縮形は、(1)の例や英語の sci-fi が示すように、第一要素と第二要素の前部を切り取ってつなぐ(2a)パターンが基本的である。⁴混成語で

は、日本語の「とらまえる」や英語の smog から明らかなように、第一要素の前部と第二要素の後部を結合させる (2b) のパターンが基本的であるという違いもある。このように、混成語と複合語の短縮形では、第二要素が前部省略か後部省略かという形態的違いもあり、このことから同じ語形成の過程であるとは言い難い。複合語の短縮形と混成語では、上述以外の相違もあり、次章で混成語の特徴を明らかにしていく中で指摘したい。

3. 混成語の条件

3.1. 選択的關係 (paradigmatic relation)

いくつかの辞典で混成語について調べてみると、次のように記述されている。⁵

- (3) a. 二つの単語の意味や形が類似しているため、互いに混合して新しい形となった単語。
- b. 二つの類似した語が意識的あるいは無意識的に混交をおこして二構成要素が部分的な形でない交ぜになったものを言う。
- c. 意味も形も似ている二つの語または構文が一方の前部と他方の後部とが組み合わせられるという形で混合し、新しい単語または構文を作ることを行う。

(3)の記述から、混成語形成過程の入力条件として、意味や形の類似性を挙げることができる。この条件は、混成語の代表例として辞書などでしばしば引用されている「昭島市 (昭和／拜島)」、「大田区 (大森区／蒲田区)」、「ゆすぶ (ゆう／むすぶ)」、「さがねる (さがす／たずねる)」だけでなく、次の(4)に与えられた若者ことばなどの新しい混成語にも当てはまる。⁶ 入力条件としての意味や形の類似性というこの特徴は、混成語形成だけに見られるものであり、複合語

の短縮形のもとになる複合語形成にはそのような特徴はない。

- (4) 「脂ギッシュ (脂ぎった／エネルギーギッシュ)」 「いかつく (いかる／むかつく)」 「おしゃばり (おしゃべり／でしゃばり)」 「おま公 (おまわり／ポリ交)」 「おやふく (おやじ／おふくろ)」 「ずたぼろ (ずたずた／ぼろぼろ)」 「パーベキ (パーフェクト／完璧)」 「バイナラ (バイバイ／サヨナラ)」 「ばほ (ばか／あほ)」 「やかん (やばい／いかん)」 「ふっそり (ふとい／ほっそり)」 「ウッキー (うれしい／ラッキー)」 「ことな (こども／おとな)」 「ファームラン (ファール／ホームラン)」 「かゆったい (かゆい／くすぐったい)」 「こっさり (こってり／あっさり)」 「イラムカ (イライラ／ムカムカ)」 「ボラバイト (ボランティア／アルバイト)」 「トラバイト (トラバユ／アルバイト)」 「ねもじい (ねむい／ひもじい)」

(3)の記述にある意味や形の類似性というのは、換言すれば、意味的に関連性(同義語・反対語)があり、同じ品詞という統語的特徴を持つことであると言えるだろう。窪園 (1995) では、この意味的・統語的特徴を、選択的關係(paradigmatic relation)の条件として一つにまとめられている。混成語形成に関わるこの選択的關係(paradigmatic relation)の条件は、日本語特有のものではなく、(5)に示すようにに英語にも適用される条件である。

- (5) smog (smoke / fog) camcorder (camera / recorder) flurry (flutter / hurry) twirl (twist / whirl) galumph (gallop / triumph) cafetorium (cafeteria / auditorium) broasted (broiled / roasted) brunch (breakfast / lunch) cranapple (cranberry / apple) boxer-cise (boxing / exercise)

しかしながら、意識的に形成された混成語の中には、選択的關係の条件に抵

触し、選択的關係というよりむしろ連語的關係 (syntagmatic relation) となっている場合がある。次節では、選択的關係に違反している混成による語形成をどのように考えたらよいのかを検討し、そのような混成語は混成語としての資格を欠いているとみなすべきなのか、あるいは、選択的關係の条件による制約が強すぎるため可能な出力まで阻止しているとみなすべきなのかについて検討したい。

3.2. 無意識の混成語と意識的混成語

混成語には、「ゆすぶ (ゆう／むすぶ)」や幼児語に見られる crocogator (crocodile/alligator) のように無意識の言い間違いから生じる場合のほかに、意識的に作り出される場合がある。混成による語形成は、Lewis Carroll が、かばん語と名づけたように、一つのことばに二つの意味を込めた結果、簡潔で新鮮な語感を持つようになるためか意識的に作られることが多い。ことば遊びを好む若者ことばの「いかつく (いかる／むかつく)」、商標としての「ダスキン (ダスト／ぞうきん)」、また、新しい事柄に対する造語である boxercise (boxing / exercise) やメディアでの最新の混成語「アグフレ (アグリカルチャー／インフレ)」などがそうであり、その場で消えてしまうものもあれば、一般的に使用され残っていくものもある。無意識の言い間違いでは、類似の語との混同から生じるため選択的關係の条件に抵触するものは少ない。一方、意識的な混成語形成過程では、一つのことばに二つの意味を込めインパクトと面白みのある語を作りたいという心理が働くためか、選択的關係の条件に抵触する場合が多い。次の(6)および(7)の混成語の入力となる二語には意味的・統語的類似性はほとんど見られない。

- (6) 「ねぼる (寝坊／さぼる)」「チャリダー (チャリ／ライダー)」「あほバイザー (あほ／アドバイザー)」「ペライド (ペラペラ／ペライド)」「写メラマン (写メール／カメラマン)」「ネカマ (ネット／オカマ)」「おたくショ

ン (おたく/アクション)」「ソネット (ソニー/インターネット)」「ちゃごむ (茶/なごむ)」「アグフレ (アグリカルチャー/インフレ)」

- (7) bufferin (buffered / aspirin) motel (motor / hotel) quasar (quasi / stellar) camporees (camp / jamboree) infanticipate (infant / anticipate) urinalysis (urine / analysis) heliport (helicopter / airport)

窪園 (1996: 147-148) は、「ロツテリア(ロツテ/カフェテリア)」、「カモメール (カモメ/メール)」、heliport (helicopter / airport) の例を挙げ、これらは意味的関連性から見ると、混成語形成とは言いにくく、むしろ、複合語の特徴を有しており、途中段階で複合語が生成されたと考えることも不可能ではないとしている。また、Swatch (Swiss / watch)、bit (binary / digit)、motel (motor / hotel) などは句の短縮形の解釈が可能であると述べている。太田 (2001: 863-864) は、さらに、Spam (spiced / ham) の例を加え、これらは、複合語、または、句の短縮形とみなすことで、選択的関係の条件は無効ではないとしている。いずれも、選択的関係の条件に違反しているものは、混成語とは見なさないという立場である。

しかしながら、混成語は選択的関係の条件だけで決まるわけではない。意識的に形成された(6)や(7)の例を見ると、選択的関係の条件に抵触してはいるが、混成語の基本パターンである入力となる二語の前半部と後半部から混成されていることがわかる。複合語の短縮形の場合は、すでに指摘したように、複合語の第一要素と第二要素の前半部を残すパターンが、基本的で生産性が高い。句の短縮形の場合も、以下の例から明らかなように、構成要素の前部を残し結合するパターンが多い。

- (8) 「きよぶた (清水の舞台から飛び降りる)」「ドタキャン (土壇場でキャンセルする)」「やはた (やらずはたち)」「あけおめ (あけましておめでと

う)」「ことよろ (今年もよろしく)」「ベルさっさ (ベルが鳴ったらサッサと帰る)」「ちょべりば(超ベリーバッド)」「チョウガンブ(超顔面不細工)」「チョイキモ (ちょっと気持ち悪い)」「チョベリバ (超ベリーバッド)」「チョベリブ (超ベリーブルー)」「チョベリビ(超ベリービックリ)」「ありごぞ (ありがとうございます)」「まじぎれ (まじで切れる)」「もとさや (元の鞆に収まる)」「かなやば (かなりやばい)」「徹ファミ (徹夜でファミコンする)」「だめもと(だめでもともと)」「きれカジ(きれいなカジュアル)」「コイバナ (恋の話)」「即レス (即時にレスポンスを返すこと)」「すごさら (すごくさらさら)」「もしドラ (もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら)」「わたおに (渡る世間は鬼ばかり)」

(6)、(7)の例は、選択的関係の条件には違反しているが、前半部+後半部という混成語の形態的特徴を有しており、前半部同士で結合する複合語や句の短縮形とは異なる。また、次章で述べる長さの音韻的制約は、混成による語形成を特徴付けるものであるが、(6)や(7)の例はその制約も満たしている。このことから、(6)、(7)のような例は複合語や句の短縮形というよりむしろ、混成語とみなしたほうが妥当であるように思える。

選択的関係の条件は、無意識に形成された混成語および意識的に形成された混成語の両方に適用され、違反する場合は、混成語ではないとする強い制約でなく、混成語のある程度の傾向を述べたもので、結合パターンや音韻的制約ほど一般性の高いものではないと見たほうが妥当であるように思える。特に、意識的に形成される混成語の場合、インパクトやことば遊び的要素も加わるので、結果として二語の関係が選択的関係ではなく、連語的關係 (syntagmatic relation) となる可能性も高い。以上のことから、選択的関係の有無だけで、混成語であるか否かを決定するのではなく、より一般性の高い結合パターンや音韻的制約をもとに、混成語であるか否かを決定すべきであると思われる。

4. 音韻的制約

2章で、混成による語形成は、入力となる二語ABとCDの前半部Aと後半部Dを混成して混成語ADが形成される過程であることを指摘した。この形態的特徴は、混成語の基本パターンであり、構成要素の前部を残すことが基本である複合語や句の短縮形との違いを示すものである。第3章では、先行研究をもとに、意味的・統語的類似性という選択的關係を持つ傾向があること指摘した。

次に、検討すべきことは、入力となる二語のどの部分をどのように切り取るかについての制約である。混成語形成のそのような制約に関して、窪園(1995: 180)は、出力は入力となる二語のうち右側に来る語と同じ長さになるということを示し、次のように定式化している。

(9) 長さの制約

$AB/XY \rightarrow AY$ において、XYとAYは同じ長さを持つ。

長さの制約は日本語にも英語にも当てはまるものであるが、日本語と英語では長さを測る尺度が異なる。日本語はモーラ言語であり、英語は音節言語であることはよく知られている。長さを測る尺度の違いは、このモーラ言語と音節言語の違いを反映している。つまり、モーラ言語である日本語では、右側の要素XYと混成語AYのモーラ数が同じになることであり、音節言語である英語では、XYとAYの音節数が同じになることを意味する。

(9)の制約によって、3モーラの「ダスト」と4モーラの「ぞうきん」の混成語は、右側の要素である4モーラの「ぞうきん」と同じ4モーラの「ダスキん」となる。「ダスン」「ダスウキン」などの混成語は、それぞれ、3モーラと5モーラであるため、それらの生成は長さの制約(9)で阻止される。同様に、(9)の制約は、英語の混成語の長さも説明する。2音節語の breakfast と単音節語の

lunch の混成語は、右側の要素と同じ単音節語の brunch となる。breakfunch は 2 音節語となるので(9)によって、その生成は阻止される。

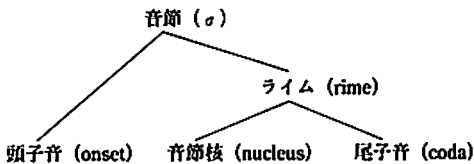
さらに、窪園 (1996 : 195) では、もう一つの重要な音韻的制約が指摘されている。それは、入力となる二語のそれぞれの語内において、どの位置で切り取られ、結合されるかに関する制約である。この制約にも、(9)の長さの制約と同じように、モーラ言語と音節言語の違いが反映されている。

(10) 結合点制約

2 原語は、英語の場合は頭子音と母音の間で、日本語の場合はモーラ境界で分裂・結合する。

(10)の制約で、分裂・結合が生起する頭子音と母音の間の位置とは、音節構造 (11)における頭子音とライムの間である。⁷

(11)



この制約により breakfast と lunch の混成語は、brunch であると予測され、他の出力は阻止される。blunch は、breakfast の第一音節の頭子音が分裂したものに、まったく分裂が起こっていない lunch が結合されているので、(10)の違反となり生成されない。brunch は、breakfast の第一音節の音節核と尾子音の間で分裂し、そこに、ライムから枝分かれした音節核と尾子音の間の位置で分裂した lunch の -nch が結合がされているので生成されない。brlunch は、breakfast の第一音節の頭子音と音節核の間で分裂・結合しているので問題は

ないが、lunch が分裂されないまま結合しているので生成さない。このように結合点制約である(10)は適格な混成語の生起と不適格な混成語の不生起をきれいに説明する。日本語は、音節ではなくモーラが分裂・結合の境界となるため、英語のように音節構造の頭子音と母音の間で分裂・結合したダーキン (dasuto / zookin) は生成されない。

英語だけに見られる混成語の音韻的特徴として、多音節語の場合、その強勢型は右側の要素の強勢型を受け継ぐことが、Quirk et al (1985: 1583) で指摘されている。motor と hotel の混成語 motel は hotel と同じように第二音節に第一強勢が付与されている。これは、混成語の形態的特徴と制約(10)からの当然の帰結と言える。つまり、分裂・結合がなされる位置が頭子音と母音の間にあるため、英語の強勢型を決定する重要な情報が語末に保持されるからである。英語の強勢型は品詞と語末の音節が軽音節か重音節かによって予想することができるということが成生音韻論の研究ですでに明らかにされている。(10)により頭子音と母音の間で分裂・結合がなされるということは、強勢型を決定する上で重要となる軽音節と重音節を区別するライムが語末に残されることを意味する。また、形態論にとって重要な規則である右主要部規則 (Righthand Head Rule) により右側の要素の品詞が混成語に受け継がれる。⁸ その結果混成語は、右側の要素の強勢型を受け継ぐことになる。日本語では、モーラ数と品詞でアクセント型が決定されるのではないので、右側のアクセント型が混成語に受け継がれることはない。このように英語だけに見られ日本語にはない特徴もあるが、長さや分裂・結合の音韻的制約は、英語と日本語の両言語に必要な制約であり、それらは可能な混成語を生成し不可能な出力を阻止する。

最後に、混成語形成における今後の課題について簡単に触れたい。日本語の混成語形成では、どのくらいの長さを切り取るかに関しては、これまで論じたものとは異なる形態的・音韻的制約が働いているように思えるがわからないところもある。例えば、「パーフェクト」と「完璧 (かんぺき)」の混成語として、「パンペキ」、「パーフェキ」、「パーペキ」の3通りが可能である。これらは、混

成語の形態的特徴である前半部分+後半部分で形成され、長さや結合点の制約も満たしている。不可能な出力「パンペキ」、「パーフェキ」を阻止し、「パーペキ」を生成するために、形態的制約で処理する可能性が考えられる。つまり、「完璧」などの複合語は、形態素の境界が「完」と「璧」の間にあるため、分裂・結合の形態的制約として、形態素の境界で生起するということで処理できるかもしれない。その結果、「パンペキ」、「パーフェキ」は、派生されないと考えることができる。これは、「おまわり」「ポリ公」の混成語「おま公」、「ずたずた」「ぼろぼろ」の混成語「ずたぼろ」にも当てはまり、分裂・結合の境界としての形態的制約は、当を得たものと言えるだろう。しかしながら、「おやじ」「おふくろ」の混成語「おやくろ」では、一つの形態素内で、分裂・結合がなされている。この場合は、分裂・結合の境界としての形態的制約というよりむしろリズムに関わる音韻的制約によるものかもしれない。つまり、リズムの最小単位を二モーラとする日本語のリズムに起因するものと考えられる。⁹ 従って、分裂・結合の境界としての形態的制約の妥当性に関しては、複合語を含む入力から形成された混成語の詳細な分析を行うとともに、リズムとの関係も検討する必要があると言える。また、形態素境界のない「うれしい」「ラッキー」の混成語は、「ウッキー」だけが可能な出力であり、「うれきー」の生成を阻止するために、日本語の特殊音素と混成語のとの関連性なども検討すべきであると思われる。

5. おわりに

本稿では、先行研究に基づいて、混成による語形成に関わる制約には、混成語形成の入力となる二語の前半と後半で形成されるという形態的制約とともに長さや分裂・結合点の音韻的制約があることを指摘した。また、従来、混成語の特徴と考えられていた意味的・統語的制約である選択的条件は、意識的に形成された混成語の場合、ことばの持つインパクトや面白さなどが意識されるた

めか、言い間違いなどから無意識に形成された混成語と違い、その条件を満たさないものが多い。従来の研究では、選択条件を満たさないものは、複合語や句の短縮形として処理されていた。しかしながら、それらは、複合語や句の短縮形の形態的特徴ではなく混成語の形態的特徴を持ち、また、混成語だけに当てはまる長さの音韻的制約にも抵触していないことを本稿で指摘した。このことから、従来研究のように、選択的条件は混成語形成に関わる強い制約とみなすのではなく、ある程度の傾向を示したものとして捉えるべきであり、選択的条件に違反しても、他の条件が満たされれば混成語とみなすべきであることを論じた。

第4章では、これまで提案された形態的制約と音韻的制約だけでは説明できない混成語形成があることを指摘した。それらをきれいに説明するには、切り取られる長さや分裂・結合の境界としての形態素の役割、特殊音素と混成語の関係、リズムと混成語との関係などを今後、検討する必要があると言える。

注

- 1 Pyles (1971:298) では、これらの英単語の出現年が記述されている。それによると1500年代の中頃から1600年代の後半に形成されたことがわかる。
- 2 メディアの最新語では「アグフレ (アグリカルチャー／インフレ)」、新製品のネーミングでは「ウォッシュレット (ウォッシュ／トイレット)」、若者ことばでは「脂ギッシュ (脂ぎった／エネルギー)」などがある。
- 3 『日本文法大辞典』(1967) や櫻井 (2002) では、複合語の短縮形と混成語を同じものとみなし、区別されていない。
- 4 窪園 (2002:133) によると、この背後には略語は元の単語の形を想起できる形でなくてはならないという原理が働いており、さらにこの原理は、人間は単語の前半部分を、特に語頭の情報をもとに単語を記憶連想しているという心理言語学の原理に基づいており、複合語短縮の基本パターンはこのような大きな原理に基づいて選択されているとしている。
- 5 (3a)は、『日本文法大辞典』(3b)は、『国語学大辞典』、(3c)は『国語学研究辞典』による。

- 6 若者ことばの資料は、北原（2006）、「現代用語の基礎知識2007～2009」、米川（1997）、米川（1998）、亀井（2003）、糸井（2005）による。
- 7 これは、生成音韻論の多くの文献で支持されている音節構造であり、音節核はピーク（peak）と呼ばれることもある。
- 8 Williams（1981）で提案されたもので、複合語や派生などの語形成によって形成された語は、最も右側の要素から統語的・意味的情報が受け継がれることを述べた制約で、形態論の重要な制約である。
- 9 城生（1988）、坂野（1996）を参照。

参考文献

- 糸井重里監修（2005）『言いまづがい』新潮社。
- 太田 聡（2001）『混成語考』『意味と形のインターフェイス』下巻 862-871、くろしお出版。
- 亀井 暉（2003）『若者言葉辞典』NHK 出版。
- 北原保雄監修・「もっと明鏡」委員会編（2006）『みんなで国語辞典—これも日本語』大修館書店。
- 窪園晴夫（1995）『語形成と音韻構造』くろしお出版。
- 窪園晴夫（2002）『新語はこうして作られる』岩波書店。
- 国語学会編（1991）『国語学大辞典』7版 東京堂出版。
- 坂野信彦（1996）『七五調の謎をとく』大修館書店。
- 櫻井忠子（2002）『ネーミング発想法』日本経済新聞社。
- 佐藤喜代治（1988）『国語学研究辞典』7版 明治書院。
- 城生伯太郎（1988）『ことばのリズム』『月刊言語』Vol.117、No.3、24-31。
- 堀内克明・山西治男（2007）『若者ことばの解説』『現代用語の基礎知識2007』自由国民社。
- 堀内克明・山西治男（2008）『若者ことばの解説』『現代用語の基礎知識2008』自由国民社。
- 堀内克明・山西治男（2009）『若者ことばの解説』『現代用語の基礎知識2008』自由国民社。
- 松村 明（編）（1991）『日本文法大辞典』11版 明治書院。
- 米川明彦（1997）『若者ことば辞典』東京堂出版。
- 米川明彦（1998）『現代若者ことば考』丸善。
- Pyles, T. (1971) *The Origins & Development of the English Language*. New

York: Harcourt Brace Jovnovich.

Quirk, R. et al (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*.

London: Longman.

Williams, E. (1981) On the notions 'lexically related' and 'head of a word'.

Linguistic Inquiry 12, 245-274.